

子どもの心を見つめて いわさきちひろ展

2020年10月17日(土)～2021年1月31日(日)

※会期は予告なく変更になることがあります。

協賛：株式会社ジャクエツ

いわさきちひろは、生涯、子どもを描き続けた画家です。ちひろは、平和な日常のなかでかがやくいのちを見つめ、子どもが見せる一瞬の表情や、あらゆる姿態を描きました。

ちひろの没後、子どもたちを取り巻く環境は急速に変化し、物質的な豊かさが喧伝される一方で、子どもをめぐる深刻な問題も伝えられています。

また、未だ収束の見通しがつかない世界的なパンデミックが、子どもたちの心に落とす影も案じられます。

ちひろが描いた子どもたちの姿には、時代が変わっても変わることのない子どもの心と、かけがえのないひとりひとりの尊厳がとらえられています。

本展では、ちひろの絵とことばを通して、改めてちひろが願った子どものしあわせと平和を見つめ直します。



1. シクラメンとふたりの少女 1972年

どんどん経済が成長してきたその代償に、人間は心の豊かさをだんだん失ってしまうんじゃないかと思います。

それに気がついていない若者は多いのでしょうけれど、私はそのことを早く気づいて、豊かさについて深く考えてほしいと思います。

私は私の絵本のなかで、いまの日本から失われたいろいろなやさしさや、美しさを描こうと思っています。それをこどもたちに送るのが私の生きがいです。

いわさきちひろ 1972年

いのちを育みながら

1951年に息子が生まれ、その成長を見守るなかで、ちひろの筆致は飛躍的にのびやかになります。ちひろが子どもの本を舞台に活躍を始めたころ、日本は高度経済成長期の只中にありました。人々が物質的な豊かさを求め、核家族化が進むなか、ちひろは、子どもの内面を見つめ、その日常の姿に共感を込めて描きました。



2. ゆびきりをする子ども 1966年



公益財団法人いわさきちひろ記念事業団
ちひろ美術館・東京

chihiro.jp

TEL.03-3995-0772(業務用)

お問い合わせは、広報担当：入口・北村まで

ちひろの詩

ちひろは、自作の詩とともに絵を発表することもありました。日々のくらしのなかにある喜びや驚きをやさしいことばでつづった詩には、子どもの心を失わずにいたちひろの好奇心や感性がみずみずしく映し出されています。

はなやさんの まどは

はなやさんの
まどは
くもっている

それで
わたしは じを

きれいで
やさしい
はなのじなのよ



3. 「はなやさんの まどは」 1969年

ちひろが描いたあかちゃん

ちひろの描くあかちゃんは、月齢の違いまで描き分けることのできる観察力とデッサン力に加え、息子を慈しみ育てた実感が込められています。水彩の微妙なにじみや濃淡を駆使して描かれたあかちゃんからは、しっとりとした肌ややわらかな髪の手触りが伝わってきます。その無垢な姿は、かけがえのないのちの尊さを私たちにうったえかけているようです。



4. 湯あがりのあかちゃん 1971年

絵本に描かれた子どもの心

ちひろが残した約50冊の絵本のなかには、さまざまな子どもの心がとらえられています。

息子をモデルに子どもの生活を描いた『ひとりのできるよ』、自身の子どものころの感受性を反映させた『ゆきのひのたんじょうび』、戦場にいる子どもたちに心を寄せて描いた『戦火のなかの子どもたち』など、子どもの心を描いた9冊の絵本をピエゾグラフ作品*で紹介します。

*ピエゾグラフ作品：原画の色合いや風合いをデジタル情報として保存し、最新技術による耐光性のある微小インクドットで精巧に再現した作品



5. 赤い毛糸帽の女の子 『ゆきのひのたんじょうび』(至光社)より 1972年



ちひろ美術館コレクション

絵本の世界を飛び出して

2020年10月17日(土)～2021年1月31日(日)

※会期は予告なく変更になることがあります。

協賛：株式会社ジャクエツ



6. クヴィエタ・パツオウスカー 『紙の町のおはなし』より 1999年

クヴィエタ・パツオウスカー

Květa Pacovská 1928- チェコ

『紙の町のおはなし』(小学館)は、ちひろ美術館に収蔵されたパツオウスカー自身の作品を紹介した絵本です。わくわくする「紙の町」で、紙という素材の自由さ、楽しさを教えてくれます。「紙の町」の住人として登場する立体や平面の作品を展示します。



7. クヴィエタ・パツオウスカー 黄色いクレヨンを持つ像 1988年 ※『紙の町のおはなし』に収録



8. エフゲーニー・ラチョフ ロシア民話「きつねとつる」より 1967年

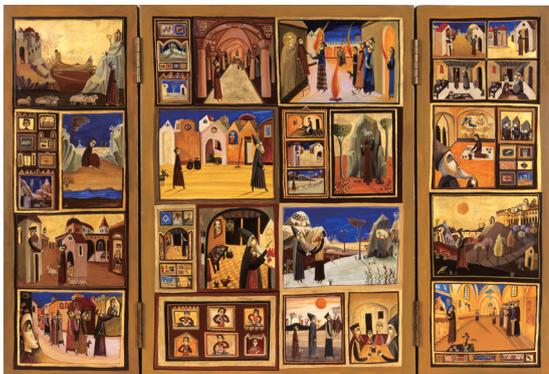
エフゲーニー・ラチョフ

Evgenii Rachev 1906-1997 ロシア

シベリアの狩猟地で子ども時代を過ごし野生の動物に親しんで育ったラチョフは、動物を主人公にしたロシア民話の絵本で、長年日本でも親しまれています。「林の中を歩くのが好きで、枝や、根を眺めていると、自然に動物の形が見えてくる」といい、拾った木に手を加えて今にも駆け出しそうな鳥をつくりました。



9. エフゲーニー・ラチョフ 走る鳥 1965年



10. ビンバ・ランドマン 三連祭壇画『ジョットという名の少年 羊がかなえてくれた夢』 2002-2003年

ビンバ・ランドマン Bimba Landmann 1968- イタリア

ランドマンは、イタリア・ルネサンス期の幕開けを飾る画家・ジョットの人生を描いた自作の絵本『ジョットという名の少年 羊がかなえてくれた夢』(西村書店)の全場面を、三連祭壇画の形に再構成し、伝統的なテンペラの手法で金色に輝く背景に描きました。

ちひろ美術館コレクションを紹介する本展では、世界の絵本画家たちの作品のなかでも、絵本の世界を飛び出した創作活動を紹介します。

林で拾った木の形を鳥に見立てて彫刻をつくったエフゲーニー・ラチョフ(ロシア)。紙という素材の魅力を自在に引き出すクヴィエタ・パツオウスカー(チェコ)。木やブリキなどを用いていきいきとした動物をつくり出すユゼフ・ヴィルコン(ポーランド)。愉快な人や動物たちを流木からつくり出した荒井良二(日本)。自作の絵本を三連祭壇画の形に再構成したビンバ・ランドマン(イタリア)。

5人の個性的な画家たちの、自由な発想から生まれた造形をお楽しみください。